

作品紹介 松本山雪筆《龍虎花鳥人物山水図押絵貼屏風》

長 井 健

はじめに

江戸時代前期に伊予松山藩の初代御用絵師として活動した松本山雪（？～一六七六）。当館では、近世伊予ゆかりの画人の中では最も重要な存在と位置づけ、開館以来調査研究を重ねており、平成十八年度に企画展「松山藩御用絵師 松本山雪―桃山と江戸のはざまに―」を開催^①、その後も新出作品をいくつか収蔵するなど、着実にその成果を積み上げてきている。

さらに当館では、個人所蔵の山雪作品も数件寄託いただいているが、本稿では、先頃新たに寄託となった《龍虎花鳥人物山水図押絵貼屏風》（図1、以下「本作品」と呼ぶ）を紹介し、山雪作品の中での本作品の位置づけを考察したい。

作品の概要

本作品は、紙本着色、十二図の押絵貼からなる六曲一双の屏風である。本紙の法量は、各図一二六、五×五四、四センチを数える。伊予上灘（現・伊予市双海町）の旧家に伝わったものという。落款はないが、各図の下部には、計七種の印章が組み合わされながら捺されている。いずれの印も、これまでに確認されている他の山雪作品に使用されるものである。

なお、本作品について、すでに平成十八年度開催の企画展「松山藩御用絵師 松本山雪」の準備段階で、当館ではその存在を把握していたが、当時は保存状態が良好でなかった事もあり、展覧会への出品は見送り（図録には参考図版として

掲載^②）、その後拙稿において簡単な紹介を行った。近時、所蔵者が変更となったことと幸いにも修復が行われて、面目一新され、当館へ寄託されることとなった。ただし、修復時に押絵貼の順序が一部入れ替えられている。以下、各図を見ていきたい（便宜上、龍図から始まる隻を右隻とし、右隻第一扇から左隻第六扇まで①～⑫の番号を付した）。モチーフ的・構図的には概ね二図ずつの組み合わせになっており、バラエティに富んでいて、さながら山雪お得意の「モチーフの見本帖」のような様相を見せている。

【右隻】

①龍図／②虎図

ともに印章…白文重郭方印「松本」、白文木瓜形印「山雪」（図2）

左右対角に向かい合う形で配置され、諧謔的な表情・ポーズを見せる龍虎図。狩野山雪に同趣の作例（図3）があり、同系統の粉本の使用など影響関係が推測される。

③花鳥図Ⅰ／④花鳥図Ⅱ

ともに印章…朱文風炉形印「岨巔・山雪」（図4）

⑤花鳥図Ⅲ

印章…朱文甕形印「山雪」（図5）

⑥花鳥図Ⅳ

印章…白文木瓜形印「山雪」(図2と同印)

一図ずつ様々な種類の花鳥を描き分けている。樹皮や枝の執拗な細部表現や、屈曲しながらも垂直方向あるいは円環状に伸びる樹木の表現が特徴的で、他の山雪の花鳥画にも共通する。

【左隻】

⑦樵夫図／⑧漁夫図

ともに印章…白文重郭方印「松本」、朱文釜形印「心易」(図6)

①②の龍虎図同様に、やや諧謔的な表情を見せる。寄った黒目、大きめの頭部などアクのある人物表現は、山雪画には頻出するもので、独特の個性を示している。拙稿⁴⁾でも指摘したように、こうした表現は、十七世紀中頃から十八世紀にかけて見られる、室町風を固持したような京都の漢画家たちの表現を先取りしたものと見え、いわゆる「雪舟ブーム」の中における山雪の立ち位置を考える上で、特に重視すべきものであろう。

⑨山水図Ⅰ／⑩山水図Ⅱ

ともに印章…朱文釜形印「心易」(図6と同印)

⑪人物図Ⅲ

印章…朱文重郭方印「御免筆」(図7)、朱文風炉形印「岨巖・山雪」(図4と同印)

⑫人物図Ⅳ

印章…朱文風炉形印「岨巖・山雪」(図4と同印)

《製茶風俗図屏風》(当館蔵)や《諸芸遊楽図屏風》(個人蔵・当館寄託)など、基準的な山雪作品である楼閣山水図形式の風俗図のモチーフを、それぞれ遠景(⑨)及び拡大トリミング(⑪⑫)したような画題。⑨⑩のほうは、前述の⑦⑧同様、建造物の強調された輪郭線や、墨調の強い岩皴の表現など、室町風(雪舟風)が顕著である。⑪⑫は、眠りこける人物など《製茶風俗図屏風》《諸芸遊楽図屏風》などにも散見される、いかにも山雪特有のモチーフが取り上げられている(図8)

⑩)。また馬の独特な描写や着色の手法なども共通している。

書付の存在と制作年代

本作品の解体修理が行われた際、①龍図の裏打紙に書付(図11)が見つかり、次のとおり記されていた。

寛文九年酉ノ六月日 松本心易山雪圖之

灘六郎左衛門押絵十二枚

これにより、本作品は、寛文九年(一六六九)に山雪によって描かれ、「灘六郎左衛門」なる人物(表具師か)⁵⁾によって十二図組の押絵貼にされたことが分かり、当初より現状の十二図からなる押絵貼屏風であったと考えられること、そして何よりも、履歴がほとんど知られず、また年記の入った作品もほぼ皆無である山雪にとつて、⁶⁾「寛文九年」という具体的な制作年が語られている点で、無視できない文字資料となる。

ただし書体は、現存する山雪作品の落款と比較して、完全に一致すると断言できるものは残念ながら見当たらなかった。最も近いのは《製茶風俗図屏風》(当館蔵・図12)と言えるであろうか。あと「心易」の書き方(崩し方)は《野馬図屏風》(個人蔵・図13)⁷⁾に類似している。山雪の落款は、作品によって書体にかなり差異があるため、現状では落款印章から編年の手がかりを得るまでには至っていないこともあり、また本作品自体にも落款が入られていないので、現時点では山雪本人のものであると断定することは難しい。普通に考えるなら、押絵貼を行った「灘六郎左衛門」なる人物の筆と解釈するのが自然と思われるが、筆者は修理には立ち会っていないので、旧屏風での裏打の状況等が不詳のため、これ以上の検証は控えたい。ただし書体そのものは江戸前期のものと見ても違和感はないので、ひとまず制作当時のものと見ておきたい。延宝四年(一六七六)没と伝わる山雪

なので、本作品は晩年の作ということになり、今後の山雪研究、特に編年作業における一つの指標として位置づけられよう。

本作品は、多くの画題を網羅的に描き分けた押絵貼という形式から見ても、藩主直々の用命による特注品というよりは、レディメイド的な性格の「山雪ブランド」作品として制作されたものと推測され、この種の押絵貼屏風がある程度量産されていたと考えてよからう。⁸⁾従来、作例の多い馬図については押絵貼屏風が複数知られていた山雪だったが、この他にも《雄鶏図》(当館蔵・図14)や《騎驢人物図》(当館蔵・図15)といった現在掛幅装で伝わっている作品も、当初は押絵貼屏風のうちの一図であったと考えられるふしがあり、本作品も含めたこれらの作品の存在は、様々な用命に応じる御用絵師として、弟子たちをある程度統率して組織的な活動を行っていた山雪の姿を、今後は考慮していく必要性を示唆するものと言える。

註

- (1) 『松山藩御用絵師 松本山雪―桃山と江戸のはざまに―』 展覧会図録、愛媛県美術館、二〇〇七年
- (2) 前掲(1) P.102
- (3) 拙稿「松本山雪の花鳥図について」『愛媛県美術館研究紀要』第八号、二〇〇九年
- (4) 拙稿「江戸初期画壇における「室町」なもの」と松本山雪「前掲(1)」図録所収
- (5) 本作品が伝来したという上灘は、大洲藩の蔵や番所があった要地であった。また上灘から近い伊予市中心街にも「灘町」という地がある。こちらは、山雪が仕えた松平定行が、寛永十二年(一六三五)七月に松山入封する直前、大洲藩主・加藤泰興により松山藩領から大洲藩領への替地が行われて開かれた町で、「諸々御免地」として地子(税金)や諸役が免除された特権的地区として栄えた。あるいは「灘六郎左衛門」とは、これらの地と関係のある人物かも知れない。
- (6) 前掲(1) 図録掲載の《馬図》(図録No.9)には七十五歳の落款があり、従来唯一の作例として知られていたが(ただし落款の書体が他の作品との差異が大きく、山雪真筆と断定することは慎重を要する)、生年不詳の山雪にとって制作年の判明した例は本作品が初めてとなる。

(7) 前掲(1) 図録No.6の作品。

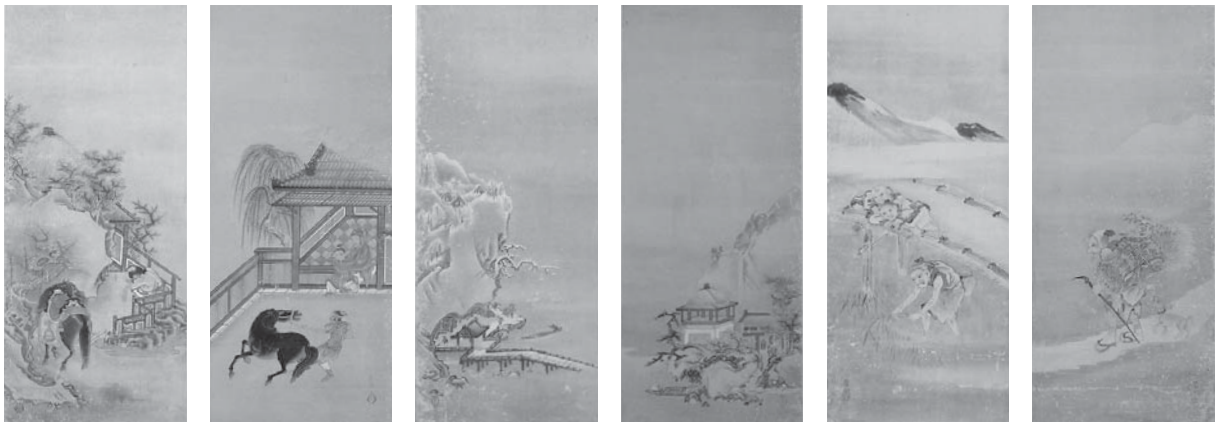
(8) ちなみに、本作品が制作されたと考えられる前年の寛文八年(一六六八)に、山雪が長きにわたって仕えた松山藩主・松平定行が没しており(なお、定行は万治元年(一六五八)に長男・定頼に家督を譲り、松山郊外の東野御茶屋に隠居していた。また定頼も寛文元年(一六六一)に江戸で没し、その次男・定永の治世となっていた)、少なくとも本作品への定行の関与はないものと思われる。

本稿執筆にあたり、岡田孝次郎氏、文琳堂・金本基氏、愛媛県教育委員会生涯学習課・井上淳専門学芸員にご協力を賜りました。ここに記して感謝いたします。また図3は『松山藩御用絵師 松本山雪―桃山と江戸のはざまに―』展覧会図録(愛媛県美術館、二〇〇七年)より転載しました。

図1 松本山雪《龍虎花鳥人物山水図押絵貼屏風》(個人蔵・当館寄託)



右隻



左隻

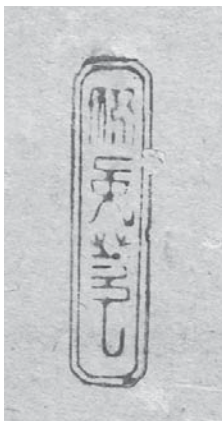


図7
白文重郭方印「御免筆」



図6
白文重郭方印「松本」
朱文釜形印「心易」



図5
朱文麤形印「山雪」



図4
朱文風炉形印「祖嶺・山雪」



図2
白文重郭方印「松本」
白文木瓜形印「山雪」